

成形圖說

菜蔬部

二十五

清印
農商務省
圖書
第五
號
共
冊

太政官文庫
和書門
八三四二
類
號
函架冊
三〇

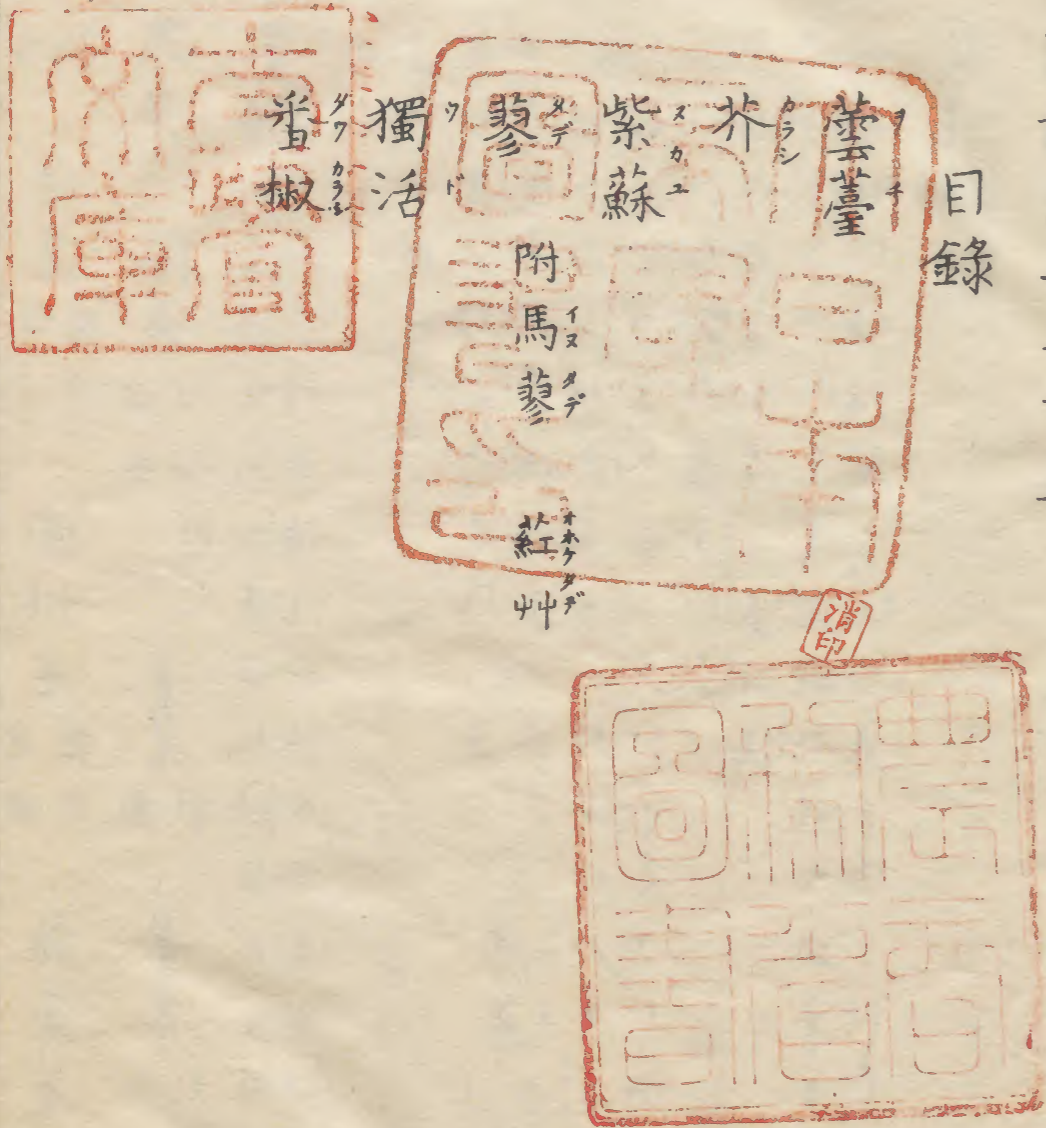
內閣文庫
和書
八三四二
類
號
函架冊
三〇
九六函
一九架

內閣文庫	
番號	和 8342
冊數	30 (25)
函號	196 98



成形圖說卷之二十五

目錄



成形圖說卷之二十五

明治十年購求

成形圖說卷之二十五

菜部 葷辛類

袁^ヲ知^ト和^ノ名^ヲ鈔^シ○和訓菜小^ノ立^テの義^ニヤ^トり^テ今^モ菜^ノ莖^ノ長^シ

此^ノ莖^ハ他^ノ菜^ノ高^ク多^ク識^ス編^ニ於^テ知^ルノ假^字ニ^テ作^ルハ^ハ心^ヲ得^ズ

油^ノ菜^ハ脂^ハ火^ニ取^リ焼^ケテ^ハ出^スル^ハ故^ニ少^シト^シハ^ハ物^ノ膏^ニ

唯^シ其^ノ子^ハ莖^ノ葉^ノ收^メテ^ハ充^ルバ^バ也^{ナリ}冬^ニ菜^ハ生^クノ^ハ芥^ノ菘^ノと^シて^ハ生^ズ

長^ク呼^ベル^ハ因^リテ^ハ唐^ノ本^ノ艸^ニ○和^ノ名^ヲ鈔^シ引^キ本^ノ艸^及七^ノ卷^ノ食^ノ經^等作^ル芸^ノ薑^ニ曰^ク雲

芸^ノ薑^ハ唐^ノ本^ノ艸^ニ○和^ノ名^ヲ鈔^シ引^キ本^ノ艸^及七^ノ卷^ノ食^ノ經^等作^ル芸^ノ薑^ニ曰^ク雲

寒^ノ菜^ハ胡^ノ菜^以上^ノ胡^ノ薑^菜埠^ニ臺^ノ芥^ノ志^{ナリ}油^ノ菜^目綱^ニ油

芥^ノ書^ニ閉^ル臭^ノ菜^盛京^ノ通^ス塌^ノ科^ノ菜^李氏^ノ食^ノ物^ト興^ノ渠^ノ菜^正字^ト芸^ノ薑^芥

成形圖說卷之二十五

成形圖說卷之二十五

二



莖臺

王氏 菜譜 菜子 郷談 正音

蕃名フルム コーレン

延喜式營莖臺一段種子一升總單功二十八人下九十月

の頃麦と同し時タチ小下種オモシを亦多く麦種の交マヒに拌マキて播植ヒキ

る寒中と過トホシて生長オモヒもの多し春終ハルノハタチ小暖オホクれ直オモキ延ヒキ

て莖起シキし冬フユノ菘アブラナ似ニて莖系ウスアラ浅蒼コナ花攢コリさく満地イキ金カネの色

おしその香馥カク郁ツつよく聞キクるニぞニ集解シツの莖臺ウスアラ不甚オモシ也ニ

花最雪霜モトモと畏オソレて春遲霜オソシ隕コシ傷イタされ本年コトシ莖油ウスアラの儉キム歎シ

あニ○莖ウスアラと結ムスブおと芥子カラシれぬし○子實シツ色黒紫クニあり收トリ乾ホシ

炒イリあげ榨シメて油アブラとトめりト因ヲ民間ミンカの利寔トク又マタ蔬菹ソウザと勝マシきり

芥



凡油と酔ふハ菜実と或ハ乾し或ハ油を搾りて舂爛く踏
 臼水車牛轉写ハ車と牛ミ
 軸輪の如き端と鑊て曳輶も又榨油と
 の製あり皆推して其壓楨と摺緊せバ油と淋出
 九州南郊の田原度く樹莢或は草菜を焼て火種せり
 巴畑子似るハ馬骨を碎き魚肉を爛して肥糞とん
 菜子油俗子謂種子油あり香燈油の料み充るものぞ
 食ふハ毛花を去るべし然ども今料理おつりちど宋
 高僧傳云芸薹非五辛之種所食無罪
 氣味生ハ辛冷熱すハ甘温春月これと啖ハ膝脚の痼
 疾と癩に故子腰脚を患ふものは多食を禁すハ能陽氣
 と損し久瘡及口齒の病を癩し小兒ハ腹中の蟲生とい

成形圖說卷之二十五

〇主治積聚結血を破血を殺し腫を消し又血風瘀
 血と治む本朝 經驗 〇生じて搗丹毒腫痛を傳れば子に隨ひ
註食物 〇子主治一切禽獸魚介の毒を殺しあつりあつり
知新 〇子主治一切禽獸魚介の毒を殺しあつりあつり
 て白湯を和して服み吐を吐して速に愈ゆ亦白湯を衝
 て服せし魚骨竹木の刺等の喉に立上らるるを治す
 服るときは吐き吐いて刺脱けしと本朝 經驗

加カ
 良志ラシ 即芥也和名鈔引食經辛菜加カ良志ラシ
 芥子二字と罌粟の事とあし用るはわろし

青芥アラカシ 訓蒙圖彙系
 とりあり

芥名醫 別錄 辣菜羣芳 譜 芥菘正字 通 辛芳名物 方言 鼠芥鼠食 其花

而皮毛皆頓落故以名之 雀芥雀食其實而能飛翔故以名之
 以上本州和名引雀食經
 蕃名モスタールト コロイト

此もの子は色黄白と紫あるあり各葉芥の名とて呼
 ぶ又又細紗菜あり葉に皺紋ありて青翠あり故に青辛
 子と名いへり蓋し大芥の一種あるべし實辛子あ
 り葉小にして実おぼしその花を弁き実とむすぶと
 春月と期と寸凡芥ハ秋の末を蒔て春に苗と分栽と
 其性暴風と畏るといふ皆その莖葉食料不充實し塩截
 のものも辛香の氣ありて風味賞むべしその子を用ふ
 る小陳きものをよしと寸愈陳くれはいよく辛し味用

の時研て末とふらぐし末とふして貯るものハその氣
 ゆるし○一種一斤菜と云ふ或はこれと多加奈と云ふ
 此子黄白の二種あり白きものよしとす俗に是を白
 辛子江戸辛子葉辛子と云ふ即ち白芥あり食料及薬
 用よりれとよしとすつくしの園にてハ瓶後のものを
 よしとすその葉大にして縹緑白かる者也春月黄花と
 ひらき葉と云ふ形ち白梁米の如く或ハ云王世懋瓜蔬
 其の黄子ありハ黄辛子刺辛子と云ふ即ち刺芥か
 耳○西妙の高菘と云ふものこよちう勝るる東國にて
 は漬菜と云ふ芥の属ありハ順鈔に辛芥多加奈と云ふ

この莖葉喜より夏にかけて盛なり其時の美蔬と云唯子
 は用ひむ廣群芳譜謂春不老一名八斤菜是也今唐人ど
 ち、春不老と云ふに聯珠詩格種芥詩に不論青紫已離
 離芥有青紫二種離々言芥子也烟濕春畦手自治一笑摩挲空洞腹是間
 儘納幾須彌晉周伯仁指其腹謂王導云是中空洞無物又
 事文類聚子載以園蔬十詠芥詩に葉實抱芳辛氣烈銷煩
 滯登俎效微勞乍食驚頻噎○南苑子に京子ては心急く
 短氣のふ子芥と云ふれば辛と云ふものと云ふと世の
 知る所あるに危地れ方てはぬる怒らしと稱して心
 の緩温々あかふ子とてさよれば辛とつと云といふ

べし秘外臺 ○小兒五淋カランは芥子カラン 大鹿角シカク 鯉イシ 黒焼クワシ 切末キリ かし
 石榴シラカ 木と煎じその汁シラカ して丸めぬとて常此シラカ かく煎し
 用ひカラン ○耳の疼ツクみハ芥菜カラン と研乳カラン して調耳カラン 一カラン 二滴カラン ほど
 入べし ○瘡キマツキ 截キマツキ みハ芥子カラン 人參カラン 二味カラン 粘飯カラン して煉カラン 合カラン て頼カラン
 の眉カラン 此間カラン あり ●是カラン むどみして貼カラン る一は胸カラン の中カラン にちりるを
 ぬきひぬぐふ時カラン 分カラン 子貼カラン 油カラン おおきカラン 叩カラン ハ時カラン あり芥子カラン 今日
 九カラン びみあれば落カラン やさくカラン 晒カラン ぬきより芥子カラン 二日カラン 八時カラン 子か
 きバ落カラン 小くし ○歯痛カラン 子芥子カラン 蒜カラン と分カラン 研カラン くのしカラン 残カラン 子傳カラン
 痛方カラン の頰カラン 子附カラン べしカラン 但カラン も痕カラン 患カラン あり ○筋カラン 腫カラン 痛カラン みは芥
 子カラン と粉カラン かしカラン 湯カラン ぬきカラン して痛カラン む方カラン の耳カラン 子一滴カラン 入カラン るカラン 行カラン 時カラン

汗カラン 意カラン 出カラン せ ○枕カラン 虫カラン と治カラン りカラン みは芥子カラン 一カラン 研カラン て細カラン の痛カラン 疔カラン
 不カラン 子カラン 封カラン べしカラン 裁カラン 般カラン を取カラン 換カラン て封カラン ぶ ○瘡カラン 物カラン 患カラン 痛カラン 瘦カラン くみ
 芥子カラン と搗カラン 水カラン ぬきカラン 研カラン べしカラン 以上カラン 和カラン 方カラン ○黄カラン 疸カラン と患カラン 小
 子芥子カラン を搗カラン ふカラン りカラン 湯カラン ぬきカラン して貼カラン べしカラン 凡カラン 日カラン に二カラン 度カラン ぬき
 方寸カラン の匕カラン みて一カラン じづカラン づカラン 用カラン 方カラン 萬安カラン

奴カラン 加カラン 延カラン 三代カラン 實録カラン ○即カラン 紫蘇カラン 也カラン 今カラン ハ
 狗カラン 荏カラン 是カラン 蘇カラン の統カラン 名カラン 也カラン 野カラン 荏カラン 以上カラン 本カラン 紫カラン 荏カラン 葉カラン の色カラン ほど
 紫蘇カラン 名カラン 醫カラン 別録カラン ○按カラン 通カラン 雅カラン 云カラン 蘇カラン 辛カラン 荏カラン 之カラン 總カラン 名カラン 也カラン 紫カラン 荏カラン 者カラン 曰カラン 紫
 菜カラン 曰カラン 石蘇カラン 是カラン 本カラン 荏カラン 諸書カラン

蕃名ヲセイニユム

内膳式に苳裏とほるハ紫蘇卷子とて確截あるべし
此の性温地と好じ春月種子と布べしその佳劣を
の身紫子皺ありて鋸齒深く表裏紫色あり候よしと
縞紗紫蘇とて梅儲及紫用子此とよしとすよしと
花穂と発せしむる肉みその紫と收めざるべしあるハ
地の乾癆とすおよそ表青色不變するものあり候
るものは枝のげうら芳香と爲しおと一種表裏とも
青色苳葉の如くおし芳香ありしものあり東部の俗
にありハ青紫蘇とて梅子農圃に書き白蘇といふ

紫蘇

青紫蘇





紅中

青蓼

馬蓼

香蓼

るもの是其也
荏と白蘊といつど六書を荏と青蘇といいてふよ一條あり
 今薬用
 のもの身山城紀伊相模よりすまの東部の友園より
 て出あふものあり性味あどにまはかりあつるれども
 向み稀ありその子ハ関東よりハ武蔵處澤よりす
 あるハ荏子とて偽り充るものあり
 葉氣味辛温にして芳香あり○主治氣を下し痰を消す
 ○霍亂脹滿吐下せざるも生紫蘇を搗汁ととり飲しむ
 べし乾紫蘇ハ煮汁を飲之亦よし○食滯吐後紫蘇葉
 せんじ服してよし○積氣暈倒ふやくのねりりて紫蘇
めをまくくあり
 の葉を水みて煎じ服す急ある時ハ熱湯めて搦出し用

ふ木香の末少汁とてよし○吐血の黒豆一合紫蘇
 一匁水煎して服すべし○一切諸傷癥の紫蘇の葉生
 て揉傳て良○魚介禽獸の肉の中へしし乾紫蘇葉煎
 じ服すべし方 濟急 ○蟹の毒の中へしし紫蘇汁よし 金匱
 ○生紫蘇煉て露とかし 零液とほきて露とて取 酒中
 置て少許と飲ばざる氣と除て身は快と生醫家此と紫
 蘇零と云今拙み乾つる葉を香味あり 西方○風犬咬
 まつるよけ紫蘇の葉と嚼くつるさ塗べし○龍子咬
 よハ紫蘇と水うして煎じ服べし○又方砂糖玉白くも小
 塗べし○諸魚の毒の中へしし紫蘇の葉と食ふべし

以上和方 ○紫蘇散 膈氣して胸内若しく紫蘇 莖葉と陣
 一萬方 痰瘧食との進ぎも 皮 半夏一擲 椰子一桂心一枳殼分 赤伏苓一柴胡分と
 廉末し 每服三錢水中盞一ッ生薑二片入て六分に煎じ濾
 て熱し時と定め服べし ○香蘇散 四時の瘧疫傷 香附子
 毛と燎去て木 紫蘇葉 各四 甘州一炮 陣皮 二 吹咀して
 每服四錢水一盞半入七分煎し滓と濾て熱して服
 日よ三度時と定め服あり若け又葱白三莖入き煎し
 て汗とたりせば即奇験あり 以上萬 安方 ○子の氣味も葉と
 大氏相同し瘡と去よハ葉よ勝とつるありい生おて
 搗胡麻よ代てもちよべし氣類味あり ○紫蘇飲 妊娠の

胎上ノ騰子胸腹脹
 當飯三分甘州一檳榔子人參川
 芎陣皮白芍藥各半紫蘘一細一分坐一分煎之滓と濾て空心子
 半生薑四片葱白許入以上七分煎し滓と濾て空心子
 温め振あり○降氣湯腎虚多氣上て滓て濾て空心子
 冷て獨寒て疾く喉き咳き喘き息短目暈き腰痛
 肢し痛い喉かわきて水と思ひ頭をく目暈き腰痛
 氣上れ熱蘇子を去り子と揉り水を入て滓と濾て空心子
 肉桂を去り子と揉り水を入て滓と濾て空心子
 前胡を去り子と揉り水を入て滓と濾て空心子
 氷一盞半生薑五片棗一入八分に煎し滓と濾て食後に
 服し滓と濾て二づび一度に雜て復煎し服し此薬純氣と

下次昔京師俞山人專此薬と用て名譽あり此八味最真
 方也此佗人參附子五加皮或ハ大腹皮蘿蔔子と加へ
 此等偽方に係ると知べし以上萬安方

多ク泥テ萬葉集○即蓼の總名也夕テとレ其辛辣カの手掌ニと
 痛ム命ヲひひとテ故ニ名ヲつかめく此ノ味人口と瘞シ
 香蓼藻塩○多識青蓼新六紫蓼多識藍蓼鑑食
 柳蓼真蓼
 蓼本青蓼綱紫蓼本和名引陶景注紫蓼一名香蓼
 辣菜正字委葉爾苦菜通陸蓼爾雅肅寒郡假
 成形圖說卷之二十五

節侯 以上事
物異名

蕃名ワートル ペーブル

蓼の属夥しその清冷辛香と賞としとせしものかれど
風ウツ付タみ香カラ蓼タと味コ味ミよりいしへを葉ハよりハ主オモに穂と
用しやどよ万葉ももわう宿のほとて四フル幹カラはくくやし
実ミもあふまぐみ君とくさむ又はめ言ふ心より品
うさこしにちほしみて入江に穂蓼のくさ世の中内膳
式ニ蓼タ菹ノ四斗 料塩四升拾 あど阿もあぬ穂と塩漬せ
しあり 禮記云鵜羹雜羹駕羹釀之蓼今蓼料の專とする
鮓サ鱠ウあり其酢ソと和ワその蓼醋サとをむらうし
又薬料も蓼実と用ふるあつハ方書ふるえつり今を

穂ホよりも葉とつうひうりわぎとありぬ○一種柳蓼ヤキタ

として食料とせしものあり葉狭長ホウカありて細柳葉ウヤキハの如し
こは本艸和名香小蓼葉尖ホと云ものよや蓋フタく水蓼
の穂ホと陸田ハタケとやしあつハかくカク変カるとそ又万葉の推蓼ササ
と詠ヨミハ即本艸和名水蓼和名美都多天ユタテとあるりて
丹波長平の勅號記より河蓼カハタと見えつりこの水蓼ハ
即蓼の水中小生して細小あるものあり一種冬を色イロて
枯カびあり俗ソコは是と冬蓼ユタテといへば播磨飾磨郡シカモノハ四シ
時トキ又穂蓼あり是亦香蓼の族あり赤穂の赤蓼アカタもトウ
夕ユフテとも呼ヨびて名ナつハ柳蓼ヤキタと同し又紀伊の

大也穂蓼も世に美種と云今京畿下鴨水の中あぢ小生
 るもの実の水蓼あり葉細長く味極て辣しむうすり
 の名産より定家の秋は山は松茸ありに行人はか茂
 此川原の穂蓼とぞほむ蓼実よく毒と解け 又相摸高座郡蓼川
 村は蓼川より川あり濁さ二三回小るぞおの川を
 水中カチとに四時蓼イッモ生エき極寒の候ハ川をあるハ枯て水中
 のに存る味微し苦て撈て辛しカラ実小自生の水蓼あるべ
 し爾雅云蕃虞蓼又本州和名は澤蓼引雑一名女増陰委
故以名之 引拾遺スツホと云ふものはあり○驚甚蓼と畏る故は同食
 ぞぐりどとりりり○本州の木蓼ハ木天蓼あり

青蓼葉氣味辛温少して毒あり多食すれば心痛を發し
 胃口と傷といつり其汁と羹と和ずれば甘味と生を○
 主治邪氣と除き氣と利は故は酒醴と釀して風冷と治
 あり○霍乱は蓼とせんト腰湯とすもよし○蜂螫は
 蓼葉とよみて貼べし濟急 ○中暑昏仆として暑はあつり
 死する時濃蓼と煮て飲しむべし或ハ口中小灌ぶよ
 凡藥は皆食蓼と用ふ千金 ○婦人月事來て蓼或は蒜
 と食ふとあつり萬安 ○腫物の痕み毛生ぬみは香蓼
 の實細末みし麻油ガシおて潤滑べし○湯火傷湯火傷を原
書ヤケトコロと云義ありヤケドハ畧みハ蓼乾切末
或ヤケアトの略法あるべし

ふし柿漆カキシみて調トキ附ツべしシ疼イタ愈ユ々々也也蚤イハの痛イタみもあしし○途
 申マウよて暑アツ氣ケ申マウさるみい蔞シの生薑シヤウ二味回シく研水スイ
 みてヒ一ツツ、用ユふ○毒ドク虫シの蟄らるみい蔞シと摩附ツてよ
 し○又マタ方ホウ麻マ油ユあら火シヤク燭シヤクとして燃燭モキさるさやうと油ユふ
 て調附ツべし○鼻ハナ衄ナみい蔞シと接てその汁と頼み附べ
 し以上和ワ方ホウ○實ジツ主シユ治チ目メと明みし氣キと下し小兒シヤウ疳カン
 と治む○一種毛ケ蔞シは亦山サン蔞シ多タ識シともろゆ蔞シと尖と毛
 との二ふわり並ナり白毛シロと毛と毛と毛接ツて嗅バカホ芳香カホハし其長ナガ短ミダ
 子ハ尺シヤク汁シユ毛モは二尺シヤク許コみ及ふ本牝メ和ワ名ナ引ヒキ兼ケン名ナ苑エン蔞シ
 とつみて即ソコ本ホン牝メの毛蔞シあり○霍カク乱ラン蛇ヘビ虫ムシ心ココロ痛イタみハ山ヤマ

蔞シ復フク干カン十シユ齋シヤウ葷シユン三サウ蔞シ干カン十シユ厚コウ朴ホク十シユ番バン椒ケウ一イツ甘カン牝メ少シヤウ五ゴ味ミ切キ末マツ小
 し糊みて豉シ豆トウの大子シヤウ丸ワウめ二三サン十シユ粒リヤクづ、白ハク湯トウみて用ユふ
 和ワ方ホウ一イツ○俗ソコ澆キヤウみ食蔞シ虫ムシの不知チ蔞シとは性シヤウ癖ヘキの白其シ非ヒと
 萬マン方ホウ一イツ○俗ソコ澆キヤウみ食蔞シ虫ムシの不知チ蔞シとは性シヤウ癖ヘキの白其シ非ヒと
 知チらぶるみ蔞シと契沖チウ歌カみお地チみおと蔞々々む虫と行舟フネ
 蔞シんぞの切きみお人習シユひあると左サ思シが三都ト賦ヒみ習
 蔞シ蟲ムシ不レ能レ徙ヒ手テ蔞シ菜サイ○魏ヱ文ブン子シ云ク蔞シ蟲ムシ在レ蔞シ則シ生シ在レ芥カイ則シ
 死シ非ヒ蔞シ仁ニ而シテ芥カイ賊シ也也本ホン可レ不レ失シと石ゆ萬安アン方ホウに蔞と芥と
 合カ食シと水は味
 と大ふとわり
 狗ク蔞シ本ホン牝メ和ワ名ナ○蔞シ塩シヤウ牝メと犬蔞シの名あり凡名ナ物モノハ
 蔞シ葉エフ八ハチ字ジの黒斑ハン何ナニと目く○鬼キ蔞シ凡ヘ物モノの
 時トキ珍チン云ク每ヘ葉エフ中チュウ間カン有アル黒クワク跡キ如ニ墨シツ點テン記キ
 野ノ蔞シ
 鬼キ蔞シ凡ヘ物モノの
 高タカく太

馬蓼 本艸和名 大蓼 同上引 黑記艸 目細

所生うて辛味あし葉丈くて左右に紫黒色の斑文あり
 其状各色ひゞゞゞ一種お似て大なるものあり是
 と蠶繭艸に充る況あり神麴麦麴と製又此木の自然汁
 と用ふ此説始て水雲記又出せり天工開物云凡造神麴
 又丹麴と造れ沖繩人毎糟一斗入馬蓼自然汁三升明礬水和
 土製は非ざれ有明炭墜の端に馬蓼灰茄梗灰烟艸梗灰三
 の品を調合して附きだ抱て火を保あり又松杉の節或ハ
 剛木の櫓柱に馬蓼の灰を付し米汁にて煉て櫓柱の切口

子塗附日乾て火と煎半ハ灰に埋壺ハ火浴み消ぞ○痼
 疾と治るに馬蓼と蛭各馬焼細末にし六分づゝ白湯の
 て用ふ日は二夜に一度而穢物を下せばよし○血通
 産前産後みは馬蓼葉とゆり黒燒河床みし白湯みく
 用ふ一以上和方○為家飲みかゝり式川とややさぬ大
 での種子成るおどおひく人乃かま
 大毛蓼 毛蓼に類て大きく莖葉 狗蓼 和名鈔註艸と
 穂垂蓼 花莖と成し下 真虫艸 虻蛇の毒と解
 波布天古夫良昔時或は雷豆の効あり本幹の江門也
 形畧荏艸子似るおし蓋大おすお荏艸の俗み潭きし此の

荻 艸 正字通 石龍 天蓼 以上 別錄
 名龍古艸亦作龍鼓○通雅作 蕪 亦作 蕪 爾雅紅龍古其
 龍 鷓 並語轉耳亦云龍頭艸 大蓼 網 天蓼 水紅花 以上
 遊龍 毛詩作游龍○正字通 海蓬科州 訓蒙 屈龍 淮南 水蓬
 事 物 水紅蓼 醫學 函 海蓬科州 訓蒙 屈龍 淮南 水蓬
 紺珠 水紅蓼 醫學 函 海蓬科州 訓蒙 屈龍 淮南 水蓬
 花 府河間 曲爰花 法名物

此 之 好 水 旁 一 一 び 生 れ ば 年 々 自 苗 と 出 出
 う き 之 の 代 丈 又 近 く 系 糸 く 幹 こ も 又 白 草 あり 幹 長
 又 随 ひ 下 系 ハ 枯 あ がる 秋 植 と 考 る 頗 る 軟 べ し 実 ハ 騶
 色 光 あり 菊 薺 じ も 此 艸 と 馬 牛 飼 へ 齒 と 爲 成

と して 擇 び 採 る 事 あり
 氣 味 鹹 微 寒 あり 毒 あり 消 渴 と 治 じ 葉 と 日 乾 し 臭 橙
 核 と 共 末 じ し 白 湯 少 して 服 ば 疝 痛 と 愈 す ○ 此 葉 と 接
 て 口 に 塗 れ ば 瘡 と 截 じ 於 て 効 あり 云 云 ○ 馬 蓼 荻 艸
 の 類 固 あり 菜 品 に あり ぎ 其 名 物 の 稍 同 種 あり とい へ
 附 て 載 せ ざる 以 此 あり 者 亦 此 子 儂 子

字 度 新 撰 字 鏡 ○ 頃 鈔 同 約 按 此 之 莖 中 空 あり 故 曰
 呼 ぶ 一 莖 中 の 空 あり 約 按 此 之 莖 中 空 あり 故 曰
 に 夷 侯 と 一 說 此 根 の 躡 居 せ し ぐ 竅 本 あり 故 曰
 躡 居 と 一 說 此 根 の 躡 居 せ し ぐ 竅 本 あり 故 曰

番椒 タリガシ



獨活

本草 ○ 按子獨活類細目亦一條今亦同類子收也

ハ葉類

獨滑 蒙本 長生 地頭 乙 廬 藥集

以上

獨活 羌活 羌青 護羌使者 事物異名

以上

獨搖 胡王使者 西平 輟耕錄 ○ 西平 童

本州

川羌 西羌 上呂氏藥書 以

蕃名 ウーハス

獨活羌活土當帰三の者或は相混以清の劉如金が本州

述此以辨論 ヤ 本州述云按本經止有獨活之條謂其為

雍州川谷或隴西南竝是羌地故本經所謂羌活者即是獨

活非二種也然陶隱居言羌活出羌地而益州西州者為獨

活是又一種物而二種矣時珍歷據先哲諸說而曰獨活羌活

乃一類二種以中國者為獨活西羌者為羌活正如川芎撫

成形圖說卷之二十五

十九

芎白朮蒼朮之義入用微有
 不同後人以爲二物者非矣
 按子獨活羌活一類二種
 其功味自別わ獨活は風濕と散し羌活は水濕と逐
 ひ終く關節を利はとわるが如し是あり蓋大明が日華
 本草子獨活是羌活母也の説あり周て莖根を分別て二活
 乃稱と命やるとの嘗て水藩産する所二種をもて海
 外子實問せ時清人陳大枝高萬年陳倬為が輩この字
 度と以て獨活也とし又陸澍雨陳際為等鹿宇度と指し
 てハ羌活也と鑑定せり其説ハ前古に紀載と歴擧して
 若へま扱ひ今茲子併せ登て二活の考定と凡食物
 子中ると宇度と稱一度是年と味ふ要する所山部家園

の異あり形質を亦狹葉潤葉乃別あり但野生と移して
 家園に植れを大感一種とあり今俗家園に嘗るその
 哉宇度と唱つる其有根より嫩芽を生じ京師峨嵋山
 わる子出るとの或花宇度と名く庭洲産する醍醐烏
 頭牙と出るとればむらしあり名毒とせしありし○凡嘗
 獨活の法ハその根と秋月より土窖に葬て塵芥と厚く
 覆ひ紅白乃芽と發さし秋の季よりして春晩まで市
 子鬻ふとなりその春に初つる根の尖子紫の莖いつ
 ばと芽ウドとつる二三月莖を生じて節小短き草あり
 上ハ紫子下碧子根白し地の葉莖は楕本に取あて刺

かし但肥太きり六月白子小花横開色黄あると紫とわ
り実と結ぶ葉黄あつわち己は石の上に生ふふ不
ま又厚より秋まで青色の莖と取らば皮と削あつる白
穰と奇蔬と名にあとやみ冬月その故莖を害育し
川或ハ缸桶の中一納て肥土とをもて昔ハ暖處に生ハ亦
節くよの紫花と葉はその状ハ上尖下下踏きて巨獸
の爪乃如し是とウド菜と稱へ羹中の芳氣を助るの完
と凡、暖地ありハ時み先づちて莖とも実とも花とも
皆子し○菜用の獨活とよハ皆山中自生あり莖葉子
毛ありる糙澀根の皮白く臭氣濃く其味甜子ハ却て

下不あり根の色黄く氣芬味辛子誠真と云但夏月子採
收るそのは輕虚あつて宜しからざる實は種子をのちれ
ど内実とらと採と取べしそをく志々宇度比最上は本
藩日向諸縣那處くの山中に自生せるその時節ともて
根と採る日乾さつるハ香氣清芬て薄澄れ羌活子異か
らむ但形質は漢の獨活に似て羌活よりは近々凡ハ
門等の味上り售前の羌活獨活ありハ迥々孺きらあど
数倍あり関東の二活ハ多く信濃上野等純正所あり出
以山中自生此シ、ウドと極てそ莖と羌活と稱へそ根
と獨活と稱ふ二種とも子極く鄙しき不あり又羌活と

称するもの一二種あり竹節根京師清江川高嶺山子産
 るもの紫莖の節深紫ありて香氣ありとりよきとれど
 もおみ候る崩山の花ウド菘ウドあどりよきものと大同
 小異あるものお園子菘へば亦食料みえづし
 獨活味苦く辛し性微温ありて毒なし○主治痛風の證
 ある人常子菘菜のウドと食して良み常子菘活一味水
 み菘根て杖と取き○産後中風と治るもの獨活粉黑豆
 一合美酒外一黑豆と炒て熱かぐら酒の中み入て口と封
 て大豆の氣と出さざるまで煮その酒みて獨活の粉と
 七一づ、用子○小兒手足ふるひにあり味と質と滋

獨活青皮セミン、スゲウ、カヒの霜白朮各一分甘草少六味味細末し
 绿豆ソナリわどに丸め二三粒づ、湯みて用あべし以上和方
 ○中風の口と紫齒とらひつめて深ざらひの獨活三桂
 心一分養末一分酒二盞水二盞入合て三盞み煮かして
 滓と濾し子候み分て湯みし口とこちあて服志ぬあ
 ○齒の根動て且痛みハ生地黃獨活各三細子割と水二
 盞入て一盞半に蒸し之と吹へみ蒸せどらと水二盞
 て口み御て宜し○産後此咳逆み羌活附子各茴香炒各半
 末細末し毎服二錢水一盞塩一捻入きて八分み蒸して
 服ふ一服みて愈べし以上萬安方

唐芥

即番椒也芥菜之依て命せし名あり

南蕃胡椒

或説は原その種と蕃國より漢不の傳り南蕃の

蔓州の夷は胡椒の味辛し故に胡椒の辛し

蔓州の夷は胡椒の味辛し故に胡椒の辛し

蔓州の夷は胡椒の味辛し故に胡椒の辛し

蔓州の夷は胡椒の味辛し故に胡椒の辛し

蔓州の夷は胡椒の味辛し故に胡椒の辛し

蔓州の夷は胡椒の味辛し故に胡椒の辛し

蔓州の夷は胡椒の味辛し故に胡椒の辛し

蔓州の夷は胡椒の味辛し故に胡椒の辛し

蔓州の夷は胡椒の味辛し故に胡椒の辛し

蔓州の夷は胡椒の味辛し故に胡椒の辛し

蔓州の夷は胡椒の味辛し故に胡椒の辛し

蔓州の夷は胡椒の味辛し故に胡椒の辛し

里

漢不の傳り南蕃の

蔓州の夷は胡椒の味辛し故に胡椒の辛し

蔓州の夷は胡椒の味辛し故に胡椒の辛し

蔓州の夷は胡椒の味辛し故に胡椒の辛し

蔓州の夷は胡椒の味辛し故に胡椒の辛し

蔓州の夷は胡椒の味辛し故に胡椒の辛し

蔓州の夷は胡椒の味辛し故に胡椒の辛し

蔓州の夷は胡椒の味辛し故に胡椒の辛し

蔓州の夷は胡椒の味辛し故に胡椒の辛し

蔓州の夷は胡椒の味辛し故に胡椒の辛し

蔓州の夷は胡椒の味辛し故に胡椒の辛し

蔓州の夷は胡椒の味辛し故に胡椒の辛し

蔓州の夷は胡椒の味辛し故に胡椒の辛し

櫻番椒

辣茄鏡花

白花子

蕃名ブラジリオンペーブル

ゴロートロンデスピッツ

ブラジリオンペーブル

ケレインブラジリオンペーブル

ウナルピゲ

垂番椒

ゴロートランガウナルピゲ

ブラジリオンペーブル

梅番椒

ブラジリオンペーブル

ハウウエン

檳實番椒

ブラジリオンペーブル

キリークス

右同一種

ケレインランガ

ウナルピゲ

黄番椒

ケレインランガウブルピゲスピツツレクト
ラップスターンデブラジリオンペーブル

雑色番椒

ブラジリオンペーブルメツテランガハウウエン

江戸番椒

此種の 皇國よ入しハ文祿の比りハ煙艸と共よ将来
るよ西土よても始て明季よ渡りよし彼の史乘よ
見えり今ハ山椒生薑の右よ立き其実紫々て深紅
よ色愛にべし或ハ筆頭の如く椎実の如く或ハ櫻桃の
実櫛の實ふも似て或ハ攢生或上向其大小長短尖圓肥
瘦亦雅趣あり大なる身實の長さ六寸小いよ。幹立
ハ七八尺よ近し頃間花師養得て目て一丈紅こりよ小

あるは鳩爪の如し目て鷹爪といふ大なるを王爪の
如く微尖あり目て胡類胡椒と云ふ小なるを南天燭子
の如しその実上よ向ふとて天上守外と呼ぶり 導生ハ
花子儼如又下よ垂るものと無胡椒とも下胡椒とも称
秃筆頭 又下よ垂るものと無胡椒とも下胡椒とも称
ふ一種短肥めして味辣かびて甘きものあり是と甘
唐辛子といひ黄熟のと黄唐辛子といひ金橘の如きの
と金柑唐辛子外と呼べ其種族多く 皇國に入て化
生るあり盖暖地よ生ると名辣し本藩南邊よ生る
るに愈太く愈辛し其木冬と移て槁れど又南島よ及び
沖繩よむして皆木本とありて長さ四五尺よ長つ宛

然として一灌水に似たりさうハ椒属にして南方の水
土に應ひその本邦西土に入てハ自艸木と交りたる
を亦奇むべし

氣味辛熱にして小毒ありたはく食へば宜しつゝ必
目と昏し血と破て瘡と生し胎と墮次瘡家尤いじむし
その毒ハ黑豆めて消べし因て味噌豆醬と和て煮る
がよし○寒月登と塗る此細末と泥と和れば凍凝せ
といつゝ又胤穴と蕪がれを胤逃去とあり○主治食と
進め又食と消し能胃口を開く又魚菜の腥氣と殺く細
末とあし糊と丸めるとられば腹痛寒疝腰痛及四肢の

痛と治法其法木綿の袋に番椒と納て帯とをれば腰寒
ぞ又住處の席の下に布を溼と拂ふ○或書は曰旅行軍
陣等の驛旅にありとものゝ必番椒と持て毎に食つるし
寒熱共よく防ぎ救ふと凍てかゝらざるよハ此末と
塗てよし又西瓜めて食傷せしと解あり○漬るハ尚青
き中に搗取て紫蘇葉めて裏に塩と漬石とを歴るに甚
しき辣うせて食と進むべし○海膽唐芥即番椒膏是加賀の
國にてある寺僧の製ものありとを番椒と煎煉て飴飴
のどくおして遠きよ送るなりその根宛然満後湯と塩
凝せしものおとれよ名くその辛辣殊も猛烈し○

雞ニトリ又ハ養鳥カヒトリの患ワツラフハ唐芥シラカシと水ミヅと搔カキくくく吞ノドむむ○馬
 の背セと措傷サレキくく時三年味醬唐芥五六十分シ少シし入イ入
 焼ヤクりて貼ツクる也也馬療ウマノチヤウ○蝨齒シシキハ番椒コシヤウハ巴豆ハハ一ヒト兩リウ一
 ●是コノ強シみし穴アナみ入イべし巴豆ハハ齒シの根ネみた、ミて爛シるル子
 ハ葛根ニヤクランと加カゆユハ乃ナ愈ユかカる○蟻アリ地チ咬クみ番椒コシヤウ粉コと配
 みて粥カ粥カべし○手足テの跣ハダと治イはハハ手テ足ソクと傷キて
 故コトハ麻マ免ミと云イ漢カン豆トの累ツ重チ重チ番椒コシヤウと火ヒ子コ煨イて焼ヤク
 子コ翻フみ押オシ交マつマ茶チャ飲インめてメてテ此コノ方カタ舛マ傷キみミおオし○鼻ハナ
 血チと止トるル子コハ番椒コシヤウ粉コと出デるル空カラの上ノ子コ松マツりリくクべし○
 又マタ方カタ湯ユ子コ唾ハと入イりリ子コ灌カンもモしシいイらラ不フどトもモたタらラく

子コ頭カみミ如ニくクべし○胸ムネ虫ムシと治イるル子コタウカラニと粉コみし
 十二ジュニ三分サンブ食シふフべし以上和方○咳セキ嗽ソウハ梨ナシ子コ一ヒト子コ五イ十
 の孔アナと刺サシ孔アナ毎マ子コ番椒コシヤウ一粒ヒトツブと納シ麩クの粉コふフて包ツクと灰ハイ火ヒみ
 て煨イて冷ヒヤるルと粘ネりて番椒コシヤウと去クるル食シふフ熱アツさうちニ食シふフべ
 っッらラんン生ナマ

成形圖說卷之二十五終

五... 二十五...



Faint vertical text columns on the right page, partially obscured by the seal and bleed-through from the reverse side.

